

技術科教育におけるジェンダーの影響と実態の基礎的研究

A Study on Influence and Actual Conditions of Gender in Technology Education

今村 有里*・尾高 広昭**

Yuri IMAMURA and Hiroaki ODAKA

要 約

本研究では、学校教育におけるジェンダーの影響と実態を11年間の岐阜県教員の技術分野の教員と管理職の人数を職員録によって調査した。さらに、同じ教科でありながら歴史的には男女が別の学習内容を履修し、その後に男女共修となった中学校技術・家庭科の技術分野におけるジェンダーの影響などを大学生対象に質問紙調査によって調査した。

その結果、岐阜県教員の調査より中学校技術・家庭科（技術分野）女性教員の割合の低さがわかった。また、小・中学校において管理職の女性教員の割合が増加していることがわかった。岐阜県では、16年間で技術分野担当教員が4割ほど削減されていた。さらに、質問紙調査結果として男子学生の方が技術分野を好むが、男女とも意識に大きな差異はないことがわかった。

1. 緒言

ジェンダーに関しては、学校教育では世論を反映していち早く取り組みがなされ、男女混合名簿の活用など、男女平等へのこだわりは散見できない。しかし、中学校技術・家庭科技術分野（以下、技術科とする）は、普通教育でありながら、生徒にとって技術科＝男性というイメージが強い教科である。

現在の学校教育ではさまざまな取り組みがなされ、性別にとらわれた意識はなくなってきている。しかし、実際は意識していないところや目に見えないところでは性差は依然として残っているという現状があり、生徒たちはジェンダー・バイアス（性別による差別）を感じている。今後、ジェンダー・フリー（性別にとらわれない）教育を実践することで、すべての児童生徒が自分らしく生きていくための学校教育にしていくことが大切である。

日本女子社会教育会によると、日本では「男らしく、女らしく」育つことを期待する親は調査対象者の5割に満たない¹⁾。その後、現在においては更に減少していると予想される。しかし、実際には「お手伝い」「遊び」「稽古ごと」をはじめとして多くの事柄について、子どもの性の違いによって異なった対応がなされ、子どもが受け取るメッセージも男女により異なってしまふ。これは、「隠れたカリキュラム」のように大人たちは無意識のうちにその行為を行うことで、意図しないままジェンダー・バイアスの再生産を行っているのである。

朴木佳緒留²⁾が1997年に示した問題点五点の観点が示されているが、これらは現在においてはかなりの変化があった。例えば「教育機会の実質的な不均等」に関しては、学習指導要領によって全員が同じ内容を学習することが明示されており、ゆとり教育が見直されたことから選択教科の授業が廃止になり、男女別学の授業は行われていない（必要な性教育を除く）。

山口教子³⁾は、中学校技術・家庭科を学習した男女の大学生を対象にした意識調査の結果、男女の性差による好き・嫌いの差異がないこと。性差の問題よりも興味・関心に応じた基礎・基本を教育

* 元岐阜県市町村立小中学校事務職員

** 岐阜大学教育学部技術教育講座

が重要であること。実習中心の教科のため生徒に適した題材を選定すること。ものづくり経験の少ない女子生徒の指導は基礎・基本となる工具操作を習得してから題材の製作をさせるべきことを整理した。

本研究では、これらの研究成果を参考にしつつ、今後の学校教育にとって効果のある対策や課題について分析する。

2. 技術科教育とジェンダー

家庭科はもともと戦後教育の柱であった男女平等 (gender equality) を反映して男女共通の科目として展開されていた。しかし、「女子の特性」を重視した家庭科教育の充実を提唱する全国家庭科教育協会など家庭科教師団体などが中心となり、高等教育では女子のみ必修化され、中学校では男女別カリキュラムに再編された経緯がある⁴⁾。

小学校の家庭科は、1947年に新学制が発足した当時から男女共修の必修科目として実施されている。

中学校は、1947年に職業科が男女共修の選択必修科目として展開されたが、女子は家庭科という性別履修の傾向が顕著であった⁵⁾。1951年の改訂で「職業・家庭科」となったが、このときも男女共修の選択必修科目として展開された。1958年の改訂に際して、文部省は職業・家庭科を男女共通の「技術科」に再編する準備をしていたが、家庭科教育の存続を求める家庭科教師団体と政治家の介入の結果、技術・家庭科となった⁶⁾。1958年改訂の「技術・家庭科」では、男子は電気・機械などの生産技術に関する科目「男子向き」、女子は被服・食物などの生活技術に関する科目「女子向き」を学ぶという男女別の展開となった。この後、技術・家庭科は女性差別撤廃条約を批准したことにより、1989年に学習指導要領が改訂され男女共修が基本となったが、文部省（現文部科学省）は選択制を設けることによって男女別の適性コースの存続をした。

高等学校の家庭科は、1947年に民主的家庭の建設という理念のもとで共学選択科目として出発した。その後、社会の進展により女子の大学進学者が増加するに伴って、家庭科選択者数は減少していった。この事態に家庭科教師団体は危機感を持ち、家庭科の女子必修化に向けて動いた結果、1974年に家庭科の女子必修化が実現した。

1979年に国連が女性差別撤廃条約を採択したことを受け、日本政府が同条約を批准するのに際し、女子のみの必修や男女別カリキュラム編成が条約違反にあたりとみなされ、1993年に中学校で、1994年に高校で家庭科の男女共修が実施された。このようにして、小学校5・6年、中学1～3年、高校1年の合計6年間にわたる男女共修の家庭科教育体制が構築された。

女性差別撤廃条約はあくまでも機会均等を促すもので、「世界人権宣言」や「児童の権利に関する条約」などに見られるように、性別や人種などに関係なく、等しく教育を受ける権利を提供することを求める意味合いが強かった。つまり、それまで技術教育を受ける機会のなかった女子にも技術教育を提供し、技術の利用や技術に関わる労働に積極的に関与することを求める意味合いが強い。女性差別撤廃条約の批准を進めていた外務省は「生徒個人が選択できればよい」という立場であった。共修に際して、中学の技術・家庭科や高等家庭科は完全な選択科目にすることもできたが、文部省は女子に対する家庭科教育を堅持するために必修科目として展開することにした。しかし、中学の技術・家庭科技術分野の授業時間数の減少という代償をとらざるを得なかった。

男女の差異化する学校文化の代表例として、技術・家庭科が挙げられる。普通教育における技術教育として展開されている中学技術科は中学1～3学年の3年間のみ授業である。しかし、1989年の改訂により家庭科の男女必修化の影響を受けて学習時間は以前の3分の1以下になった（表1）。

表1 技術・家庭科 技術分野の履修時間数の変遷⁷⁾ (国立教育政策研究所, 2001)

領 域	1958年	1969年	1977年	1989年	1998年
製 図	55	45	—	—	—
木材加工	65	58	約58	35	合わせて 35
金属加工	50	58	約46	約12	
機 械	45	59	約38	約12	若干 (選択)
電 気	45	59	約64	約20	若干 (選択)
栽 培	20	35	約38	約12	若干 (選択)
情報基礎	—	—	—	約12	35
合計 (男子)	315	315	245	105	88
合計 (女子)	0	0	一部	105	88

単位 単位時間数

表2 家庭科の履修時間数の変遷⁸⁾ (国立教育政策研究所, 2001)

学 年	1958年	1969年	1977年	1989年	1998年
小学5年	70	70	70	70	60
小学6年	70	70	70	70	55
中学家庭分野	315	315	245	105	88
高校家庭科	140	140	140	140	140
合計 (女子)	595	595	525	385	343
合計 (男子)	140 (280)	140 (280)	140+ α (280+ α)	245 (385)	343

注：高校家庭科は1969年から女子のみ必修化（1969年以前は選択） 単位 単位時間数

合計（男子）の括弧内の数値は高校家庭科選択時の時間数

家庭分野に適性または興味関心を持つ男子や、技術分野に適性または興味関心をもつ女子は従来よりも充実した学習機会を得ることにもなるが、技術分野に適性または興味を持つ生徒たちにとっては時間数・内容ともに非常に厳しい実態がある（表2）。

3. 研究方法

1990年代から2000年代にかけて、男女平等教育を受け継いでジェンダー・フリー教育が盛んに取り上げられ、教育現場ではさまざまな取り組みがなされてきた。この間に学校教育において、どのような取り組みがなされ、生徒たちにどのような影響を与えてきたのかを分析した。

本研究では、技術科教育とジェンダーに関する分析のため、第1に岐阜県教員の学事関係職員録の実態データの分析などを実施し、第2に技術科を履修してきた大学生を対象とした質問紙調査による結果の分析を実施し、学校教育におけるジェンダーの影響や実態を整理することが目的である。

3.1 職員録からの岐阜県教員の実態把握

(1) 岐阜県中学校技術科教員の男女比の実態

① 調査目的

この調査は技術科教員の男女比の移り変わりを調査することによって、隠れたカリキュラムの実態

を明らかにするとともに、政策等の成果や課題を明確にすることを目的としている。技術科教員を選んだ理由は、他教科に比べて偏りが大きいことが考えられるためである。

② 調査方法

岐阜県学事関係職員録（岐阜県学事関係職員録編集委員会編集・発行）の1995年度、2002年度、及び2011年度より調査した。技術科教員免許の有無や講師、他教科との掛け持ちは考えず、教科に技術との明記があり、技術科の授業を主に教えている人数である。

(2) 岐阜県小学校管理職の男女比の実態

① 調査目的

教員の階級で管理職にあたる校長と教頭の男女比を調査することによって、教育現場の現状や課題を明確にすることを目的とする。児童が目にする機会も多く、身近な働く大人である教師の管理職であるため、児童への影響は少なからずあると考える。公務員は世間の先駆けとなるべく動いているため、学校における女性管理職員の割合がどうなっているか明らかにした。

② 調査の方法

岐阜県学事関係職員録（岐阜県学事関係職員録編集委員会編集・発行）の1995年度、2002年度及び2011年度から、女性教員が多い小学校の校長先生、教頭先生の男女比率について調査した。

3.2 技術科履修の大学生対象の質問紙調査

(1) 技術科教育に関する大学生の男女の意識の実態

① 調査の目的

ジェンダーについて盛んに議論された時期に中学生として授業を履修した大学生139名（男子学生65名、女子学生74名）を被験者として、技術・家庭科に対する意識について調査した。その結果を分析・比較することで技術科教育やジェンダー教育の成果や課題を整理することが目的である。

② 調査方法及び調査内容

大学生を対象として調査を行った。結果に偏りが出るので避けるために、国立大学法人G大学教育学部を中心に、地域科学部、応用生物学部、工学部、医学部の1から4年生のほかに、私立N大学の学生に調査を依頼した。

内容は先行研究との比較を目的としているため、山口氏のアンケート項目を同じものにした。さらに、「隠れたカリキュラム」について追求する内容の項目を追加した。年代の統一及び教育課程等の違いを岐阜県と他県を比較するために、出身地と年齢の回答も求めた。資料1は実際に使用した質問紙用紙である（記述欄は省略）。

③ 質問紙調査内容の趣旨

質問内容は、今まで技術・家庭科を履修してきた大学生が技術・家庭科に対してどのような意識をもっており、男女の意識の差やジェンダー・バイアスの発生とその原因について調査するために設けた。

追加項目に関しては、技術の先生が男女どちらの方が向いているかという質問にすることで、隠れたジェンダー意識や、中学生の頃の技術教員の性別によるジェンダーへの影響（隠れたカリキュラム）を調査する。予想としては、技術の教員が今現在でも多数を占めていることから、男性教員のほうが向いているとの回答が多くなると考える。どちらでもよいと回答した被験者の理由を特に参考にした。女性教員に技術を教えてもらったという被験者が少しでもいれば貴重な意見であり、調査の幅が広がるので期待する。

技術・家庭科のどちらが好きかという質問においては、偏りなく男女とも好みのものを選択すると考える。先行研究の時点で、男子学生が技術で女子学生が家庭科というような傾向は見られなかった。

ただ、好きな理由のなかにはジェンダー意識からきている人もいたため、ここでは男女ともどちらが好きかということより、好きな理由を探ることでジェンダー意識を調べていく。また、男子学生・女子学生特有の理由があれば分析した。

4. 研究結果

4.1 職員録からの岐阜県教員の実態把握

(1) 岐阜県中学校技術科教員の男女比の実態

① 調査結果

調査結果を表3に示す。

表3 岐阜県中学校技術科教員の男女比調査結果

	男性教員	女性教員	合計
1995年	276 (92%)	24 (8%)	300
2002年	221 (93%)	17 (7%)	238
2011年	166 (92%)	14 (8%)	180

単位 名, () 内は百分率

調査結果から、1995年度、2002年度、2011年度ともに男女比率（女性教員が10%以下）にほぼ変化がないことがわかる。人数が減ったのは、技術科の授業時間数が減らされたこと、少子化に伴う合併により学校数が減少したことが原因であると考えられる。

1995年度の女性教員全員が技術単独ではなく他教科との掛け持ちであった。これは小規模学校だからというより、もう一人（もしくは二人）技術を担当する教員がおり、補助的に技術を教えていると考える。女性教員二人で技術・家庭科を分担して教えている学校もあったが、基本的には一校に一人は男性の技術科教員がいる状態であった。

これが2011年度になると、男女教員比率には変化がなかったが、技術科のみを単独で教えている女性教員がわずかに増加した。また、小規模校の増加により男性教員もしくは女性教員一人で技術・家庭科を教える、一校に男女教員が一人ずつおり両方が技術・家庭科を教えている学校もあった。一校に男女両方の先生が技術・家庭科両方を教える形であると、性別にとらわれたイメージに固定される可能性が低くなり、男女生徒ともに苦手意識が軽減される効果があるのではないかと考えられるため、この形は理想的であると考えられる。しかしながら免許等の問題もあるため、難しい実態である。

地区別に見ると（表4）、西濃地区と美濃地区で女性教員比が20%を超えており、全体から比べると高い比率を保っている。だが、女性教員がまったくない0%の岐阜地区や飛騨地区があり、岐阜県内での地区の差もわかった。

(2) 岐阜県小学校管理職の男女比の実態

① 調査結果

図1より、1995年から2011年現在まで管理職における女性の割合は順調に増加している。まだ偏りが無いとは言いきれないが、企業においては管理職に占める女性は1割に満たない程度である¹⁾ため、企業と学校現場とを比較すると女性の割合は高めの水準である。

地区別でみると、岐阜地区や西濃地区、美濃地区の女性管理職の割合は高くなっている。一方で、東濃地区や高山地区では1割に満たないところも見られた。全体としては増加していることがわかった。

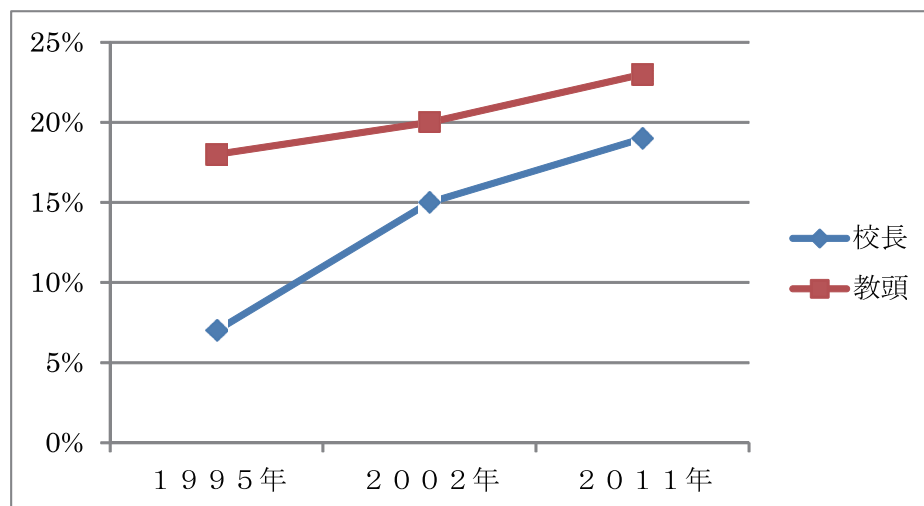


図1 岐阜県小学校 校長・教頭の女性の割合の推移

(3) 技術科教育に関する大学生の男女の意識の実態

① 調査結果

・技術のイメージについて

調査事項 (1) あなたの技術に対するイメージを教えてください。

男子学生・女子学生ともに、「木工」「はんだごて」「パソコン」など中学校技術科の学習内容について述べている回答が大半を占めていた。

男子学生と女子学生を比較してみると、「〇〇が楽しい(楽しかった)」という回答が男子学生に多く、逆に「難しい・大変」という回答は男子学生には一人も見られなかったにも関わらず、女子学生では5名の回答があった。さらに、「男性向きのもの」という回答が、男子学生では1名だけだったが、女子学生では4名の回答があった。男子学生に比べて女子学生の方が、技術科に対して苦手意識を持っている傾向があることがわかった。

また、「大工」といった職業につながるイメージを持っている回答もあった。

・男女の共修について

調査事項 (2) あなたが中学生の時、技術・家庭科は男女共修でしたか？

回答結果を表4に示す。

表4 男女の共修についての集計結果

	はい	いいえ	合計
岐阜県出身者	56	0	56
岐阜県以外出身者	77	6 (4)	83

※括弧内は男子校の生徒の人数を表す。 単位 名

岐阜県出身者は回答者全員が男女共修であった。岐阜県では設備がしっかりと整い、完全に男女共修で行われていることがうかがえる。岐阜県外出身者では、6名中4名は男子であった。他2名は愛知県出身の女子学生であった。

・技術科教員の構成について

調査事項 (3) 技術の先生は男性でしたか？女性でしたか？

回答結果を表5に示す。

表5 技術科教員の構成についての集計結果

	男性教員	女性教員	両方
岐阜県出身者	52	2	1
岐阜県以外出身者	76	6	1

単位 名

女性教員に教わったことのある回答者が、8年前よりも若干多くなった。しかし、第2章でも調査したように、まだ男女比にかなりの偏りがみられる。以下の調査事項のなかでも、女性教員や、男性教員と女性教員両方に教わった回答者の意見も再分析した。

・技術科教員の性別について

調査事項 (4) 技術の先生はどちらが向いていると思いますか？

回答結果を表6、表7に、その理由を①～④に示す。

表6 技術科教員の性別についての集計結果<男子学生>

	男性教員	女性教員	どちらでも良い	計
岐阜県内	14 (54%)	0	12 (46%)	26
岐阜県外	11 (28%)	0	28 (72%)	39
計	25 (38%)	0	40 (62%)	65

単位 名, () 内は百分率

表7 技術科教員の性別についての集計結果<女子学生>

	男性教員	女性教員	どちらでも良い	計
岐阜県内	8 (27%)	0	22 (73%)	30
岐阜県外	9 (20%)	0	35 (80%)	44
計	17 (23%)	0	57 (77%)	74

単位 名, () 内は百分率

i 男性がよい理由 (男子学生)

- ・ 力仕事があるから。
- ・ 危険な物を使うから。
- ・ そのようなイメージが強く染み付いているから。

ii どちらでもよい理由 (男子学生)

- ・ どちらでも教えられると思う。
- ・ 知識と経験があれば男女に差はない。
- ・ 教え方に関わりないと思うから。

iii 男性がよい理由 (女子学生)

- ・ ものづくりが得意そうだから。
- ・ 重いものをもてるし、危険が少なさそうなイメージ。

- ・技術系には男性の方が向いていそうだから。
- iv どちらでもよい理由 (女子学生)
 - ・教えることは同じだから。
 - ・しっかり教えられるなら誰でもよい。
 - ・技術の得意・不得意に性別差はないと思うから。

男子学生・女子学生ともに、どちらでもよいという回答が一番多かった。その中でも、女子学生の方がその傾向が強い。

男性の方がよいと回答した理由は主に3つに分けられる。1つ目は体力的な理由であった。これは、技術の教員の仕事内容を知らないことも要因としてあげられる。確かに他の教科の教員と比べて体力は必要かもしれないが男性にしかできないほどの力が必要としない。また、男性の中にも力がない人がいるように、女性の中にも男性より力がある人もいるので、男性的な傾向はあるかもしれないが、女性にも十分可能な仕事である。2つ目は男性の方が得意そうなイメージであるというものだった。理系は男性の方が得意だというイメージは根強く残っていることがわかる。こちら、理系が得意な人が男性の方が多くその傾向が強いかもしれないが、得意・不得意は個人で決めるべきであると考えられる。3つ目は技術関係に男性が多いというイメージからのものだった。中学校技術科の教員もほとんどが男性であり、技術を連想する大工や日用大工をする父親像などの影響から、男性の方が向いているという社会的背景がある。

これらを改善していくためには、技術の授業の中で女子生徒が苦手意識を持ってしまわないように配慮することや、男性女性関係なくできるものであることを知ってもらうようにする必要がある。また、隠れたカリキュラムとなって技術＝男性のものというメッセージを知らぬ間に与えてしまっている男性教員ばかりである現状も、変えていく必要があると考える。

注目すべき点としては、質問項目(3)において、女性教員に教わったことがあると回答した学生全員がどちらでもよいと回答している。実際の体験において、学習に不自由がなかったからだと考えられる。また、女子学生の回答の中には、女性教員であったからこそ質問しやすく、教えてもらいやすかったという人もいた。男子生徒と女子生徒を比べると、どちらかという女子生徒のほうが興味を持ちにくい教科であるため、女性教員が果たす役割も大きいということがわかる。

・技術・家庭の興味について

質問事項 (5) 技術と家庭どちらが好きでしたか？

回答結果を表8に示す。

表8 技術・家庭科の興味についての集計結果

	技術分野	家庭分野	両方好き	両方苦手	合計
岐阜県出身者 (男子学生)	18 (69%)	6 (23%)	1 (4%)	1 (4%)	26
岐阜県出身者 (女子学生)	13 (43%)	17 (57%)	0	0	30
岐阜県以外出身者 (男子学生)	23 (61%)	14 (37%)	1 (3%)	0	38
岐阜県以外出身者 (女子学生)	11 (25%)	31 (70%)	1 (2%)	1 (2%)	44
男子学生合計	41 (64%)	20 (31%)	2 (3%)	1 (2%)	64
女子学生合計	24 (32%)	48 (65%)	1 (1%)	1 (1%)	74
全体合計	65	68	3	2	138

単位 名, () 内は百分率

男子学生と女子学生の傾向がはっきりとわかる結果となった。男子学生は技術科、女子学生は家庭科が好きな傾向が伺えるが、もう一方の分野が決して少ないわけではなかった。両方が好きという学生も、両方が苦手という学生も男女とも両方いた。女子学生で技術の方が好きだという回答者のなかで、技術の方が好きであるにもかかわらず技術は男性のものというイメージがあると回答した学生もいた。そのイメージがあることによって、これらの女子学生の進路を狭まってしまう可能性もある。

好きな理由を見てみると、先行研究時のような「技術＝男性、家庭＝女性という固定観念」に影響されてといった理由はなく、単純に個人の好みで選択されていた。

・技術・家庭の履修内容について

調査事項 (6) あなたが受けた授業の内容について当てはまるものすべてに○印をつけて下さい。
回答結果を表9に示す。

表9 技術・家庭の履修内容についての集計結果

	木材加工	電 気	金属加工	情 報	機 械	栽 培
岐阜県出身者	96.4	69.6	64.3	87.5	28.6	3.6
岐阜県以外出身者	95.1	71.1	55.4	78.3	21.7	4.8

単位 百分率

・興味のある内容について

調査事項 (8) 技術の授業で、興味のある内容は何でしたか？当てはまるものを選んで下さい。
回答結果を表10に示す。

表10 興味のある内容についての集計結果

	岐阜県出身者		岐阜県以外出身者	
	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生
木材加工	14	17	19	29
電 気	1	1	7	2
金属加工	0	3	3	6
情 報	9	6	7	12
機 械	1	0	1	0
栽 培	1	1	0	1
な し	0	2	3	5
全 部	0	0	0	0
合 計	26	30	40	45

単位 名

・苦手な内容について

調査事項 (9) 反対にこの領域は嫌いだ、苦手だという内容がありましたか？選んで下さい。
回答結果を表11に示す。

表11 苦手な内容についての集計結果

	岐阜県出身者		岐阜県以外出身者	
	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生
木材加工	3	4	7	9
電 気	1	2	0	7
金属加工	3	5	2	6
情 報	8	11	9	12
機 械	1	3	1	2
栽 培	0	0	4	0
な し	10	5	14	12
全 部	0	0	1	0
合 計	26	30	38	48

単位 名

② 調査結果まとめと課題

今回の実態調査では、調査結果の数字ではなく主に理由内容に重点を置いた。質問事項 (3) の結果から岐阜県以外でも女性技術教員の状況は、岐阜県と変わらず割合が低いことがわかる。そこで質問事項 (3) と照らし合わせながら質問事項 (4) の調査結果を見ると、女性教員に教わった学生11名全員が「どちらでもよい」と答えている。教員を性別ではなく教員の資質や能力から善し悪しを判断しており、女性教員に教わっても特に支障はなかったという実体験からの結果であると考えられる。

ただ、質問事項 (5) の結果から、技術を苦手とする女子生徒の割合が男子生徒と比較して多いことも事実である。このことから、男性教員のみならず女性教員が果たす役割もかなり大きい。例えば、技術科教員が女性であった場合、技術分野に苦手意識を持つ女子生徒にとってはそれだけで抵抗が少なく、質問しやすくなるなど授業に積極的に参加しやすくなるなどの利点が挙げられる。質問事項 (5) からは、傾向として男子学生の方が技術分野を好むが、男女とも大きな偏りはなく、「両方好き」「両方苦手」と回答する学生が男女両方にいたことから、やはり技術＝男性のものではないということが実証された。しかし、まだ技術＝男性とイメージがあることから技術科が好きな女子生徒も避けるようになり、技術科関係の仕事には男性の割合が多くなる傾向がある。

学校教育では技術科教員は男性が多く、技術＝男性というイメージがついてしまうという悪循環が生まれると考えられる。これがジェンダー・バイアスの再生産であり、この悪循環を断ち切ることが課題である。現在の中学校技術科の授業の中で、技術科教員は男性だけではないという印象を与えていくことは女性技術科教員を増やすことを促進することにも繋がるのである。

4. 結論

- (1) 岐阜県教員調査によって、技術科教員の女性の割合が低いことがわかった。
- (2) 岐阜県の技術科教員が16年間で4割減少したことがわかった。
- (3) 岐阜県女性教員の管理職が増加していた。
- (4) 質問紙調査から教員を性別ではなく、実際の職務能力で判断していた。
- (5) 技術科を苦手とする女子が多いこともわかった。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

- ・今回の実態調査では対象が大学生であったが、現時点でのジェンダー教育の実態を調査するために

は違う世代にも調査を行う必要がある。

・比較検証対象として教育現場だけでなく企業との比較を詳しく行うことで更なる実態が見えてくるため、企業の実態についても調査する必要がある。

5. 参考文献

- 1) 日本女子社会教育会：家庭教育に関する国際比較調査（1995）
- 2) 朴木佳緒留：ジェンダー・エクィティと教育課題（1997）
- 3) 山口教子：技術・家庭科技術分野における男女の意識に関する基礎的研究，岐阜大学教育学部 研究報告 教育実践研究，第8巻，pp.109-114（2006）
- 4) 全国家庭科教育協会：会則と歩み（2011）
- 5) 佐々木亨他：各科教育法 技術科教育法，学文社，pp.17-22（1990）
- 6) 清原道壽：昭和技術教育史 農文協（1998）
- 7) 国立教育政策研究所：技術教育のカリキュラムの改善に関する研究（2001）
- 8) 同上

資料1 技術・家庭科の意識に関する質問紙

男・女 年齢 () 出身地 ()
学部 (学科 [教科])

現在、卒業研究において技術・家庭科におけるジェンダー・バイアス(社会的・文化的に作り上げられた性別による障害)について調査しています。この結果は、卒業研究の資料以外には使用しません。ご協力お願いします。

1. あなたの技術に対するイメージを教えてください。(例:もの作りが楽しい、のこぎりびきなど)

2. あなたが中学生の時、技術・家庭科は男女共修でしたか? はい ・
いいえ

3. 技術の先生は男性でしたか?女性でしたか? 男性 ・ 女性

4. 技術の先生はどちらが向いていると思いますか? 男性 ・ 女性 ・
どちらでもよい

その理由

5. 技術と家庭科のどちらが好きでしたか? 技術分野 ・ 家庭分野

その理由

6. 技術で行われていた授業について

(1) あなたが受けた授業の内容について当てはまるものすべてに○印をつけてください。
木材加工 ・ 電気 ・ 金属加工 ・ 情報 ・ 機械 ・ 栽培 ・ その他()

(2) 授業で作ったものは何でしたか?(例:本立て, 蛍光灯, ホームページ作りなど)

(3) 技術の授業で、興味のある内容は何でしたか?当てはまるものを、(1)から選んでください。

_____の内容

選んだ理由

(4) 反対にこの領域は嫌いだ、苦手だという内容がありましたか?(1)から選んでください。

_____の内容

選んだ理由

ご協力ありがとうございました。